

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第14回

* 学校教育制度とイタリア版受験狂想曲 *

立元 義弘

長いバカンスの季節が終わり、イタリアでも新学期が始まりました。日本なら真新しいランドセルを背負った、というよりランドセルに背負われたといった方が良いでしょう。ぴかぴかの新一年生たちが保護者や上級生に引率されて登校する微笑ましい光景は桜の季節の風物詩ですが、イタリアの新学期は9月。再びバカンスシーズンを迎える翌年6月中旬までの2学期制で、学期の違いの他にもいろいろ日本とは違ったところがあります。

まず、イタリアには集団登下校といったものはなく、たいていの場合は両親のどちらかがクルマで送り迎えをします。あるデータによれば、イタリアの小学生の単独登校率は7%しかなく、例えば40%に上る英国やドイツと比べても、イタリア的事象のひとつであると言えるでしょう。ですから、大きな町では毎年、新学期の始まる週の登校時間帯は、通学路や学校付近の道路事情にまだ慣れていない親の運転によるクルマが増えることもあって交通渋滞が起こります。

子供たちは、ランドセルの代わりにザイノ zaino と呼ばれるリュックを背負って登校します。小学生から高校生に至るまで通学カバンはずっとこの zaino です。カラフルで、アニメの主人公などがあしらわれているものあり、ブランドものありとバラエティに富んでいます。布製なので何万円もする日本のランドセルと比べると値段はずっとリーズナブルです。そして、ザイノの重さは子供の体重の10%を超えないように教科書や教材の量や材質を制限しないと子供たちの健康や成長を損

なう恐れがあるというような議論が沸き起こるのも毎年新学期の始まるこの頃です。

制服はありませんのでそれぞれ自由なファッションでの通学です。ですから逆に日本を訪れるイタリア人が学生服やセーラー服姿の修学旅行生の団体に遭遇したりすると、珍しさも手伝って格好の被写体となってしまいます。



【zaino】

建物も日本なら学校らしい校門があり、門構えやその向こうに見える校庭からすぐに学校とわかるものですが、イタリアでは、特に都市部では表通りから見ても他の建物の門構えとあまり変わらない校門で、校門前に生徒たちがたむろしている姿がなければ、すぐには学校とはわからない場合が多いです。校庭やグラウンドのある学校はほとんどありません。

運動会やクラブ活動などといったものもなく、子

供たちは放課後や週末に学校とは別のジムやクラブでサッカーや水泳や陸上競技などのスポーツを通じて体づくりをするのが普通です。授業は月曜から土曜までの午前中、或いは給食をはさんで午後も授業で土曜は休みの学校もあります。



【クラス風景】

イタリアの学制は、日本の小学校にあたる5年間の Scuola primaria、中学校にあたる3年間の Scuola secondaria di primo grado、高校にあたる5年間の Scuola secondaria di secondo grado からなっています。(それぞれ Scuola elementare, Scuola media inferiore, Scuola media superiore と呼ばれていたものが2003年にこのように改正されたのですが、今でも旧名の方が通りが良いようです。尚、以下、本稿ではそれぞれ小学校、中学校、高校と表記します。)

義務教育期間は2007年に、それまでの小学校・中学校の8年間から、小学校、中学校と高校の第2学年までにあたる10年間と定められました。小学校への就学年齢は日本と同じ6才ですが、日本の6・3・3制と比べると、就学期間、義務教育期間共に日本より1年長いこととなります。また、小学校へあがる前には、保育園と幼稚園にあたる Asilo nido(0~2才)と Scuola dell'infanzia(3~5才 昔は Scuola materna と呼ばれていました。)があります。

そして、高校は各自の進路によって、大学進学を前提とする Liceo と、職業的な専門知識や技術を身につけることに重点が置かれる Istituto tecnico、Istituto professionale に分かれます。

医学部や建築学部など定員の定められた一部の学部や大学を除けば、小・中・高・大学すべてのレベルの学校において入学試験はありません。

また、一部の私学や州立・県立の専修学校・職業学校を除いて大半が国立なので、日本のように、エレベーター式に大学まで進学してゆける有名私立小・中学校への“お受験”というものもなく、予備校とか学習塾といった受験産業もなければ、志望校合格を目指した受験戦争といった言葉や概念もありません。

と、そこだけ聞けば受験という厳しい競争を乗り越えて成長して行かなければならない日本人の子供たちからすると羨ましい限りに見えますが、実際にはそれなりの厳しさがあるようで、イタリアも世の中それほど甘くはないみたいです。入学試験というハードルがない代わりに、イタリア人の生徒や学生たちには中学校卒業時と高校卒業時の6月に Esame di Stato(国家試験)という関門があり、これに合格しないと卒業証書がもらえず、上の学校に進学する資格も手にできないのです。

その試験の内容はかなり濃いもので、中学校では、国語(イタリア語)、英語、第二外国語、数学の筆記試験と口頭試問があり、更に2008年度からは INVALSI と呼ばれる国立教育制度評価機構の行う客観形式の全国統一テストが国語と数学で加わっています。これらの試験を数日間かけてこなし、最終的な評価が10点満点の6点以上で合格、晴れて卒業、高校進学資格が手にできるのです。

そして、高校の卒業試験は生徒たちのみならず受験生を抱える親たちにとっても更に重要な関所です。

正式名称は同じく Esame di Stato ですが、現在も“マトウリタ(Maturità)”という呼び方の方が広く通用しているこの試験は、毎年6月に全国一斉に実施され、それぞれが6時間以上に及ぶ3次にわたる筆記試験(学校や専攻進路によっては4つ)と、数人の面接官を前にした40~60分のプレゼンテーション発表・口頭試問からなり、延べ4日間に及ぶものです。これらの試験結果に、高校在学中の成績や勉強態度も加味した内申点と併せて評価され、内申点 25点、筆記試験 45点(15点x3)、口頭試問 30点の計100満点で60点をクリアしないと、卒業証書、大学への入学資格を手にすることができないのです。

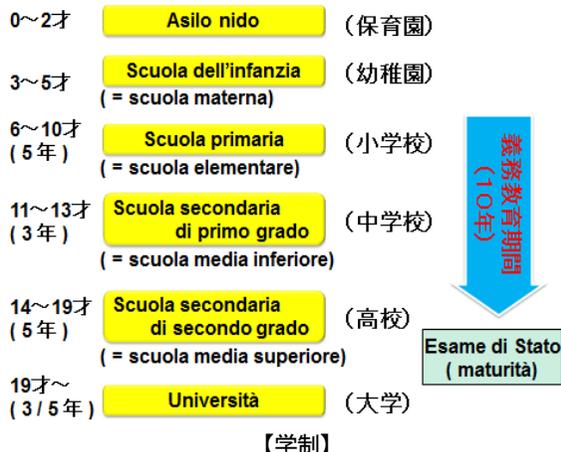
毎年、この季節が近づくと新聞各紙が特集記事を組み始め、多くの学生向けサイトがトトテーマ

(toto-tema)と呼ばれる出題予想で賑わうようになります。学生たちは試験前夜まで血眼になって出題されそうな問題とその模範解答例をネットで漁ります。さも確定情報のように伝えられるトトテーマ情報も、実際に蓋を開けてみるといずれもハズレの結果に終わっていることが多いようですし、藁にもすがる気持ちの受験生心理を手玉に取って、でたらめな情報をあたかも本物のようにして売りつけるネット詐欺商法が横行したりもしています。また、「受験生を持つ親たちのための10カ条」というような記事が出始めるのもこの頃で、受験生ばかりか親たちも巻き込んだ一大メディアキャンペーンの様相を呈する時期となるのです。

試験前夜には(実際には存在しない)オーストラリアのイタリア人学校にコンタクトすると時差の関係から翌日のイタリアでの試験問題がわかったというような都市伝説も出回ったりする始末ですが、試験当日にはやはり不正行為も後を絶ちません。こっそりカンニングペーパーを隠し持つという伝統的な手口については、小さく見つかりにくくするための折りたたみ式カンペキットや、隠しポケット付きのトレーナーがネットで売られたりします。もちろん携帯やスマートフォンの持ち込みは厳禁なのですが、それでも試験開始直後の30分で試験問題がネットに現れ、その“模範解答”の投稿が始まって、スマホや携帯を不正に持ち込む受験生に対する外部からの“サポート”が始まります。日本でも数年前に同じような事件が起こり大問題になりましたが、こちらは毎年のもので、投稿者は受験者の友人や親族、あるいは教え子を支援する(?)学校の先生だったりします。

例年のマトウリタの合格率はほぼ100%に近いレベルで、受けさえすればほぼ全員が合格するのですから、何もそこまでしなくてもという風に思うのですが、受験生にとって、そして彼らの親にとって Maturità の関門を乗り越えるということは、“成熟”を意味するこの言葉通り、一人前の大人へのパスポートを手にするということでもあるのでしょう。単なる高校卒業資格や大学入学資格の

ための試験に留まらない重みを持つ、人生においての大事なステップでもあるようです。



OECDが加盟国の15才児童の学習到達度を測るPISAと呼ばれる調査がありますが、イタリアは読解力30位、数学36位、科学35位(2009年)という結果で、歴史上あまたの天才・偉人を輩出してきた国でありながら、調査対象国65カ国の中でもあまりぱっとしない位置づけです。昨今の経済危機による緊縮財政のあおりを受けて教育に対する予算も削減を余儀なくされてきている中、このままでは将来の国家の競争力の低下にもつながりかねないという危機感から、現レッタ内閣は、520億円の予算を投じた教育政策のテコ入れに動き出していますが、義務教育修了前の学業放棄率の高さ(中学卒業時点の放棄者が5人に一人、南部だけでみると3人に一人)は欧州各国の中でも非常に高く、また、IT教育機器の普及・導入遅れを挽回しようと投資を進めても、6割超が50才以上という高齢化の進んだ教師陣(これも欧州一のレベル)に使いこなせないなどといったジレンマなど、解決すべき課題は山積しています。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第15回

堤 康徳

1949年に発表されたカルヴィーノの最初の短篇集『カラスが最後に来る』については、これまでも何度か触れてきた。今回は、表題作(*Ultimo viene il corvo*)に焦点を当てよう。というのも、この作品においてもまた、カルヴィーノの距離へのこだわりが顕著だからである。このことは、前回(7月号)もとり上げたので、ご参照いただければ幸いである。批評家のカーゼスは、『木のぼり男爵』や『くもの巣の小道』の主人公に顕著な、現実世界との距離をあくまでも保とうとする傾向を、ニーチェの用語を借りて「距離のパトス」と呼んだのだ。

なお、この短篇はかつて、米川良夫氏によって翻訳されたている(「最後に鴉がやってくる」『世界短編名作選・イタリア編』所収、新日本出版社、1977年)。

物語は、森のなかの清流の描写とともに始まる。ときおり、その透明な網目状のさざなみに、銀の羽をはばたかせるように背をきらめかせては、すぐにジグザグに潜るマスが現れる。それを川べりから眺めている男たちの一団がいる。川はマスの宝庫なのだ。全篇をつうじて、「男たち」としか書かれていないが、彼らがパルチザンであることは、物語を読み進めてゆけば明らかである。男たちのひとりが手榴弾を川に投げこんで、マスを一網打尽にしようとする。そこへ現れたのがリンゴのような顔をした山の少年だった。少年は、銃をもらうと、一発でマスを仕留めてみせる。射撃の腕をかわれて、彼はパルチザン部隊と行動をとともにすることになる。

「少年は雑嚢にリンゴとチーズのかたまりをふたつ詰めこんで出発した(Parti con un tascapane pieno di mele e due forme di cacio)」。formaとは、丸いたらいのような形をした、チーズを流しこむ円筒状の型のことである。チーズの種類によって、

大きさはまちまちだが、パルミジャーノの場合、直径が35~45cm、高さが20~25cmにもなる。トスカーナ産の(羊の乳から作られる)ペコリーノの場合、直径15~22cm、高さ7~11cmほどだ。どの程度の大きさかはわからないが、円筒状のチーズのかたまりを、少年が食糧として、まるごとふたつリュックに入れた点が興味深い。この一節をあらためて読んで、私はプリーモ・レーヴィの短篇「鉄」(『周期律』所収)の一場面を思い出した。連載第8回で、この場面を引用したので、ご記憶の読者もおられるかもしれない。作者の友人、サンドロが、生存に必要な最低限の食料として、アーティチョークとサラダ菜をポケットに入れて冬山に向かうくだりである。



【チーズのかたまり】

本題に戻ろう。少年はパルチザンの隊長の制止にもかかわらず、目に入った標的をかたつぱしから撃ち落としてゆく。対岸の松ぼっくり、銃声に驚いて逃げるウサギ、ヤマウズラやカシロなど、静止しているものも、動くものも、陸上の動物も、空中を飛ぶ鳥も、少年はけっして的是をはずさない。

やがて少年は、軍服の男たちと遭遇する。「軍服の男たち」としか書かれていないが、後述するように、彼らはドイツ兵なのだ。ここから物語はにわかには緊張感を帯びる。この場面を引用しよう。

彼らは、リンゴのように白くて赤い顔をした少年がほほ笑みながら現れたので、叫びながら彼に銃口を向けた。しかし少年は、彼らのひとりの胸に金のボタンを見つけ、それに狙いを定めて発砲した。

少年は男の悲鳴と、連発、あるいは単発の銃

声を聞いた。少年はすでに、道路のはじめの石垣の背後に逃げこみ、地面に伏せていた。

このあと少年は、ひとりの兵士に背後から発砲される。

突然、一発の銃弾が彼の頬をかすめた。振り向くと、彼の頭上の道まで、ひとりの兵士が迫っていたのだ。少年は側溝に身を投げて避難すると同時に、発砲した。銃弾は、兵士ではなく、銃床をかすめた。兵士は銃に弾をこめられないとわかると、それを地面に投げ捨てた。そこで少年は姿を現し、一目散に逃げ出した兵士に発砲した。兵士の肩章が吹き飛んだ。

このあと少年は逃げた兵士を追跡する。やがて兵士は森を追われ、草地のまんなかの大きな石の背後に身を隠す。そばには、草藪の生い茂る崖があり、そこまでたどり着ければ、少年の追跡から逃げおおせるはずだが、兵士は岩かげから動くに動けなかった。前半は少年の視点から語られていた物語が、ここから一転、兵士の視点から語り出される。

兵士の頭上は渡り鳥の通り道らしく、少年は、ヤツガシラ、ツグミ、そしてシギと立て続けに撃ち落としてゆく。兵士に残された武器は手榴弾だけだった。彼は岩かげに隠れたまま、手榴弾を少年にお見舞いしようと考えている。しかし、少年めがけて投げられた手榴弾は、放物線のまんなかで、少年の銃弾を浴び、空中で爆破する。その破片を浴びないように地面に伏せた兵士が再び顔を上げると、黒い一羽のカラスがゆっくりと輪を描きながら空を舞っていた。ところが少年は、この鳥を狙おうとせず、松ぼっくりをひとつ、またひとつと撃ち落とし始めるのだ。このあとの結末部分を引用しよう。

銃声のたびに兵士はカラスを見た。落ちてくるか？ いや、黒い鳥は、彼の頭上をますます低く旋回していた。それが少年には見えないなどということがありうるだろうか？ もしかすると、カラスは存在せず、彼の幻覚なのかもしれない。おそらく、死に瀕した者は、すべての鳥が通るのを見るのだろう。カラスを見たら、最期なのだ。それでも、

松ぼっくりを撃ち続けている少年にこのことを教えなければならなかった。そこで兵士は立ち上がり、黒い鳥を指さしながら、「あそこにカラスがいるぞ！」と自分の国の言葉で叫んだ。そのとき弾丸が彼をとらえ、軍服に刺繍された、翼を広げた鷲を正確に射抜いた。

カラスが、ゆっくりと旋回しながら、降りてきた。

この物語の背景に、北イタリア山中におけるパルチザン闘争があることは言を俟たない。したがって、少年に追いつめられた兵士は、いうまでもなくドイツ兵である。それは、今しがた引用した、「自分の国の言葉で叫んだ」という記述と、兵士の軍服の鷲章からも明らかだ。このような事実を無視してこの短篇を読むことはできない。しかしそれさえ踏まえれば、あとは、多様な解釈が成立しうる「開かれた作品」ともいえるだろう。

そもそも少年は、この兵士をどこまで敵として意識していたのだろうか。少年は、兵士の命ではなく、軍服の鷲章を狙っただけなのかもしれない。

はたしてカラスは少年には見えていなかったのか？ 死の使者として兵士の目だけに映るものだったのか？ それとも、少年がカラスを撃たなかったのは、弔いの使者として最後に残すためだったのか？

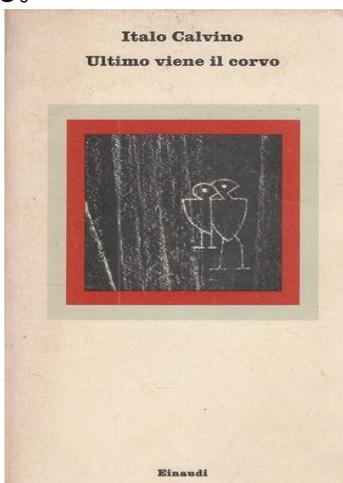
少年の銃弾は森の生き物の命を情け容赦なく奪ってゆくが、カルヴィーノの淡々とした描写に残虐さは希薄である。少年にとって銃は、武器ではなく、遊具のようさえある。少年の射撃は、何よりも、戦争に本質的にそなわる遊戯性の象徴のようにも思われる。

このような解釈をめぐる問題はひとまず措き、ここでは、少年の距離へのこだわりを論点をしばらく。「最後にカラスが来る」の少年は、現実世界との距離をあくまでも保とうとした『木のぼり男爵』のコジモや、『くもの巣の小道』のピンとはまったく反対に、目に見える対象物との距離を銃によって一挙に無化しようとする。少年にとって、森のなかで彼が目にするものすべては、「いつもの距離、つまり、銃声が途中の空気を飲みこむことによって埋めてゆく距離の範囲内にあった」。少年の距離をめぐる思考をたどってみよう。

少年はなおも銃口を宙に向けて動かしていた。考えてみれば、ふしぎなことだった。このように空気に囲まれていながら、やはり数メートルの空気によって、ほかのものと隔てられているのだから。ところが銃を向ければ、空気は、目に見えない一本の直線になり、銃口からもの——翼を動かさずに空を飛んでいるように見えるハヤブサ——へと伸びた。ひき金を引けば、空気は透明で空虚なままなのに、あちら側、直線の向こう端では、ハヤブサが翼を閉じて石のように落下するのだった。

対岸の木々のてっぺんの松ぼっくりは、なぜ見えているのに触れられないのだろうか？ 彼とものあいだには、なぜこのような空虚な距離があるのだろうか？ 目のなかでは彼と一体の松ぼっくりは、なぜ、あんなところに離れているのだろうか？ しかし、銃を向けると、空虚な距離はトリックであることがわかった。彼がひき金を引けば、同時に、果柄から切り離された松ぼっくりが落下するのだ。それは、愛撫のような空洞の感覚だった。それは、向こう側の松ぼっくり、リス、白い石、ケシの花まで、空気をつうじて伸び、銃声によって満たされる、あの銃身の空洞だった。

鳥の楽園に響く銃声は、生と死のあいだに現存するはずの隔たりをも、いやおうなく無化してゆく。そのことに無自覚な少年の銃弾は、空虚ないつもの距離を満たす一方で、銃口の延長線上にあるそれぞれの死の実体を、逆に空洞化しているのである。



【『カラスが最後に来る』の表紙】
(翻訳家、慶應義塾大学講師)

～イタリア文化セミナーご案内～

宮嶋勲先生＜出版記念講演＞
フルコースランチ付セミナー

「10皿でわかるイタリア料理」

日本人を虜にしたイタリア料理の魅力はいったいどこにあるのでしょうか？ イタリアの文化、歴史が詰まった基本料理を宮嶋先生と一緒に味わいながら、そのルーツを辿ります。

日時:10月27日(日)11時～12時 セミナー

12時～13時30分 フルコースランチ

場所:ベアート

住所:大阪市中央区鍛屋町1丁目4-2

電話:06-6943-6090

参加費:会員 6,000円、受講生・一般 7,000円

(食事代、ワイン代(赤白各一杯)、著書代含)

「ミケランジェロの魅力」

ルネサンスのみならず西洋美術史上でも飛び抜けて大きな存在のミケランジェロの生涯と作品を紹介し、その魅力に迫ります。

日時:11月2日(土)17時～19時

講師:松本 典明(阪南大学教授、文化史家)

場所:日本イタリア会館京都本校

参加費:会員 500円、受講生・一般 1,500円

大塚国際美術館名画鑑賞ツアー

「ミケランジェロに出会う旅」

高級リゾートホテルで壮大な渦潮を観ながら豪華なランチをご賞味いただいた後、(前)大塚国際美術館の超人気学芸室長員がルネサンスの名画の世界を紹介します。

日時:11月3日(日)8時～20時

行き先:大塚国際美術館(徳島県鳴門市)

参加費:会員 18,000円、受講生・一般 19,000円

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>